



幼い難民に未来を

 NO.
13

●150東京都渋谷区広尾4-3-1 ●03-499-1226 ●振替口座/東京1-36227



◇バンブー・キャンプ(Site7)地区に住んでいたカオイダン住民。突然の移転命令でビニールテント暮らし。

私と難民——援助の灯ともし続けよう

〈タイ・カンボジア国境の村〉

熱帯の国タイの乾季は、10月のある日、野にうねる銀色の砂糖キビの穂に誘われてやってきます。この時期、大地を叩きつけて降るスコールも去り、久しぶりに暑さを忘れた眠りが戻ってきます。夜の闇は濃く、遠い野を時折り走る鈍い砲弾の響きがなければ、ここが戦火の絶

いいぎり ゆき

えないタイ・カンボジア国境に近い村であることを忘れるほどです。砲声の重い音はある夜は数回とどろいて静まり、ある日は裏庭のマンゴの木立ちが夕闇に包まれる時間に、なんの前ぶれもなくズシンとあたりをふるわせます。断続する不安なその音に、深夜まで気持ちをもってゆかれることもあります。宿舎からさほど遠くない難民キャンプで、底のない闇の中、耳を立てているに違い

ない人たちがいるからです。カンボジアからの道を追われ、家族を引き裂かれ、病み、飢え、苦しんだ日々の記憶は心にしまわれても、国境の砲声は、行方のわからない両親や知人への思いを募らせ、人びとをさいなんでいるに違いありません。

〈風化する難民風景〉

激しい雨季のあとにやってくる乾季は、軍事的には大きなチャンスを含みます。この乾季が戦闘のためにある国境地帯の泥沼化した戦況は、ベトナム軍、カンボジア反政府ゲリラ軍、それにタイ軍のそれぞれを支えるソ連、中国、アメリカの政治的意図に動かされる国々の悲劇を伝えてあまりあるものです。それでいて、カンボジア問題をめぐる戦闘はすっかり日常化し、その結果、数年前、あれほど世界を驚かせたカンボジア難民の飢餓の光景は、いまでは国際社会の記憶の中で風化してしまいました。時が移って、あらたに緊急事態を伝えられるアフリカの飢餓民の話題の前には、インドシナ難民の問題は存在しないも同然なのでしょう。問題はなにひとつ解決されていないにも拘らず。

〈キャンプの中のもうひとつのキャンプ〉

昨年11月、乾季のさなか、国境地帯で、ふたたびベトナム軍とカンボジア反政府軍との大がかりな戦いが始まりました。タイ側の国境近くにあるカオイダン・キャンプでは、設備の整った病棟に、傷ついた兵士や「難民村」の住民がつつぎと運びこまれ、国境地帯の緊張が伝わってきました。年が明けて1月、ベトナム軍の攻撃は激しさを増すばかり。タイ軍をも巻きこんだ戦火を避け、タイ領内の一時避難キャンプに移されていた国境地帯の難民は、カオイダンの一部を仕切ってきたバンブー・キャンプで、タイ軍の厳重な監視下に置かれることになりました。その数は5万弱とも6万あまりともいわれています。有刺鉄線がささぎる高い盛り土の向こう側で、新しく収容された人たちは、閉ざされた生活の何である



かを身をもって経験しているに違いありません。また5年を超える歳月をひたすら待つことで耐えてきたカオイダンの住民は、この光景に、難民で一生を終るかもしれない自分たちの姿を重ね合わせます。まだ賭けたい将来があればこそ、人々は耐えることができます。しかし現実には、6年前、生命の極限を体験した人たちの置かれた状況と、いままた始まったもうひとつの暮しとの間には、本質的な違いはなにもないのです。

〈子どもと粘土〉

6年前、キャンプに収容された人たちが虚脱状態にあった頃始めた幼い子どもたちとの交流は、その後の救援活動のあり方、自立への道づくりに大いに役立ちました。キャンプ内で掘った粘土をこね、子どもたちはさまざまな形をひねり出しました。なかでも際立って多かったのが、銃を構えた兵士でした。どれもが同じに見えた兵隊らしい人間の形を「ただの兵隊じゃない。こっちはポルポト軍、そっちはベトナム兵」とある男の子は、おとなのような目で粘土の戦闘帽の違いを指さして教えてくれました。粘土が語る戦争の影のさまざまなは、子どもの心の奥にここんだ恐ろしい記憶を、すべて吐き出そうとする心の自然な働きではなかったかと思います。同じ粘土の形でも「鍋」や「しゃもじ」からは、子どもの安堵の声「いまは食べものがある」が聞こえてきたのを覚えています。

〈成田空港の難民〉

最近、成田空港待合室で、タイからアメリカへ向かうラオス系やモン族難民を見かけました。タイの奥地バンビナイ・キャンプで自然に近い暮しをたて、独自の文化を守ってきた人たちです。2月の寒気に裸足と薄いシャツの女性や子ども。ベンチに馴じめず、床に布を広げて添い寝する母子。ヤカンを下げウロウロと水場を探す老女。さすがの近代的空港もあたりを制する自然な人間の匂いを吸収できず、そこだけがふしぎな違和感に包まれていました。これまで山道を軽やかに歩いた足が、滑らかな空港の床を踏みしめられず転びそうになる様子は、そっくりそのままこの定住難民の前途を暗示するものでした。国際政治の落し子となった悲劇の人たちのあしたは容易なはずはありません。いまの国際政治の成り立ちからして、難民問題は難民を出した国だけでは解決できません。豊かな国の暮らしの安定は、地教規模の人間社会を支えるという視点があってこそ、難民の問題は私たちの関心事となります。6年前、いのちへの共感がともした私たちの援助の灯は、これからも細々とともえ続けます。

現地ボランティアだより

※ 豊かさとは

カオイダン難民キャンプが開かれてから5年余りの歳月が経った。保育センターで働いていた人たちも、アメリカ、カナダ、日本などで新しい生活を始めている。しかし、キャンプには今も長びく収容所生活の中で、自分の将来の生活設計もたてられず、不安定な時を過ごしている人々がいる。配給を持つ暮らしの中であってことに、“働く”“削る”ことが、人間にとってどんなに生きる意欲を生み出すものであるかということを教えてくれた。

保育センターの織物部屋では、クメール文化の象徴でもあるみごとなアンコール・ワットの絵柄が織られるまでになった。保育園で日々育っていく子どもたちの姿を目のあたりにしながらカンボジアの保父さんが、大きさや重さの違うはぎれ布のボールを考え出し、子どもに試している。

過剰な“もの”に囲まれて、ものを削り出す過程や労力を、又喜びさえも忘れてしまっている日本の社会において、ほんとうの豊かさとは何かということを考えずにはいられない。(関口晴美)

※ 難民とともに過して

ここタイは、日本のように四季の移り変わりがないためか、それとも日々初めてのいろいろな出来事に出逢うためか、信じられないほどの速さで毎日が過ぎていきます。私たちのそんな感覚にひきかえ、キャンプの人々にとっては、自国の将来を思い、また自分の今後のなりゆきに胸を痛め、一日が、そして一年が本当に長く感じられるのではないのでしょうか。

キャンプの状態をただ自分の目で確かめたくここにきた私ですが、難民の人々と一語に過ごすうちに最近、自分が何をしたら良いのか少しずつわかってきたような気がします。難民にとっては、仕事にしても技術訓練にしても、キャンプという特殊な社会の中で意欲的、主体的に取り組むということはほんとうにむずかしいことだと思います。しかし、たとえどんな環境にあっても一日一日を大切に生きるということを難民といっしょに私も学んでいきたいと思っています。(三浦則子)

※ 保育園の黄色い花

カオイダン・キャンプのCYR保育園には、いつも種々の花が咲いています。6年目を迎えて今では4.5mにもなるニッケイの木が、美しい印色の花を枝もたわわに咲

かせます。寺院への捧げ物として、また、木の皮を薬や香料として使えるこの花を、子どもたちは器用に木をのぼり、両手一杯に採っていきます。

昨年末、保育園裏庭にある織物教室前の花壇の隣に、新しく砂場が作られました。軽快な機織りの音と、子どものはしゃぐ声が、不思議に溶け合って響いています。少々柄が小さいのですが、真直ぐに伸びたひまわりの花が、砂だらけで遊ぶ子どもたちを見おろしています。

CYRに咲く花はいつも子どもと一緒にです。特に青い空の下、一生懸命背伸びをして咲くひまわりの花は、クメールの子どもたちの素朴な笑顔を映していると思います。

(山崎尚枝)

※ カオイダン・キャンプにて

先日キャンプ内約5千名の人々が突然居住地区を移動させられるというできごとがありました。住む家が建つまでテント生活を強いられた人々…「難民」という立場を如実に表しているように思われました。このような中で暮らす人々の心を知ることは、時には非常にむずかしく感じられます。屈折した心のヒダをちっとも理解できていない自分にハッとさせられることがしばしばです。

どんな状況にあっても人間ひとりひとりがいないがしろにされず、又そのひとりひとりが自分の力で生きていこうという意欲がもてるようであってほしい…強い力の前でこれは夢物語でしかないのでしょうか。やはり子どもたちに期待せざるを得ません。今のこの時期を子どもひとりひとりがしっかりと生きていけるようにおとなの目(芽)を育てていかなければと思う日々です。(小倉雪枝)

※ カオイダンの子どもを海につれて行きたい

カオイダンの子どもに海を見せてあげたい。あの子たちの大きく見開いた目は、藍と青とを分ける水平線をまっすぐ映し「あの向こう側には何があるんだろう」と考える間もなく海にとびこむか、あまりの水の多さに立ちすくむかであろう。想像するだけで胸があつくなる。カオイダンの子どもはしなやかでたくましく、「文明」に侵されていないという意味で、自然で豊かである。素裸で走り廻る子どもたちの姿について見とれてしまうこともある。その子どもの「自然」は有刺鉄線の内側にあり、目に見えない厚い壁で囲まれている。

この子どもたちを、あのどこまでも続いている「境」のない、青い自然の中に解き放してみたいと思うのは、贅沢な夢であろうか。海岸で波と遊んでいた子どもの姿と、カオイダンの子どもの顔がふと重なってしまう。

(タイ・バンコクの難民支援会・代表)

(河村好美)

私にできること何かありますか…

ガレージ・セールを終えて

矢尾枝園子

忙しい子育ての中、慌しく過ぎていく日々。ふと立ち止まってみると、気にかかりつつやり過ぎてしまった様様な思いの多さ。ふとしたきっかけで知りあった主婦二人が、思いを語りあい、今できることは何か…と考え実行したガレージセールは二回目をむかえました。

今回は、子どもたちが自発的に参加して、マスコット等の手作り品ばかりでなく、ヒマワリの種や公園で拾った椎の実の炒ったものの袋づめなど、工夫をこらした品品の値段つけを、楽しそうにやり、当日は、一生懸命売って残ったものには自分が大切にしているものをおまけにつけたりして完売してしまいました。物を作って、それを売ってお金にすることのむずかしさも、子どもなりに感じたことと思います。

このセールを通して、友達や知人との交わりを深めることができたり、子どもの成長や家族の協力を力強く感ずることができました。一人一人の力は微力でも、皆が力をあわせて一つの事を達成しようとすれば、何らかの形になるのだと思いました。

貧国、飢え、難民などの生じる原因は、複雑でわかりにくいけれど、物の氾濫した先進国に住む我々の暮らし方も、無関係ではないように思います。

セールではりきっている子どもたちの上に、難民の子どもたちを重ねるには私自身かなりの無理があります。自分の生活の一部、自分の考えや心の中にこうした人々の存在を思う別の視覚をもてるようになったのは、セールをやってみて、少しは現実的になれたからではないかと思えます。

周りの人々の好意を集まった品々や収益の中にみながら、同時に好意を受ける対象となるべき逆境におかれている人々の存在をかえって強く意識させられたのかもしれない。収益金や寄せられた品々が多いことは、結果論であり、それに至る過程や終了したあとの参加者の意識や購入してくださった方の意識の中に少しでも変化があったなら、それだけでセールは成功であったのではないのでしょうか。こういう意識の変革、広がりがやがて、大きな力になると思うからです。

(東京・三鷹主婦のグループ)

関西で

松本徳子

私が渡タイしたのは1981年1月でした。この世の地獄を見、体験し、絶望に打ちのめされながらも、難民という境遇の中で懸命に生きようとしている人たちと接し、この人たちのために何か役に立てるものなら—という気持で一杯でした。しかし、恥かしながら当時の私は、カンボジアでどのようなことが起こり、この人たちが、どのような道程を辿り、どんな気持で愛する祖国を逃れ、難民となってしまったのかさえ、全く勉強不足でした。会員の方々の代表のひとりとして渡タイしたにも拘らず、その3ヶ月は反省で一杯の結果となりました。

帰国後、改めて反省すると共に、せめて自分が関わることのできた人々と少しでも長く暖かく交流を保てたら—と思いタイの難民キャンプから第三国(アメリカ)へ移った人たちを訪ねたのです。言葉の不自由はあるものの、対等な人間として心を割って話をすることができ、自分の中の“もや”が一つ一つ晴れていくのを感じました。それにより初めて心から“カンボジアのことをもっと知りたい”そして更に、“会の一員としても何かお役に立ちたい”と積極的に考えるようになりました。

昨年10月、キリスト教保育専門学院の院際にパネル、現地製品の展示を計画して、大阪在住ということでお手伝いすることになりました。学院祭でご協力くださった方は皆さん、職業、生活の一部のように、ごく自然に、遠い国の見知らぬ人々である難民に対して関心を持たれているようでした。私自身も、知っている限り、その方々の質問に答えながら、また新たな思いが込み上げてくるのを感じました。

東京での催しや行事に参加したくても状況が許さず、ただ会報を待つだけの地方在住の会員の方や、関心はあるものの参加の仕方を知らない多くの人々のために何か“橋渡し”のようなものが必要なのではないかとも思ったのです。

各地方で会員同士連絡を取り合い、定期的集まれるようにし、また、東京での大きな催しや会合には代表者が参加し、後日皆に報告する—というようなことができれば、皆さんの意識の持ち方も違ってくるでしょうし、関心度も高くなるのではないのでしょうか。

カオイダン・キャンプ5年の移りかわり

カンボジアの人々が何万人という難民となってタイ領へ収容されたのは'79年10月頃である。当初は言うまでもなく緊急事態であった。80年夏の13万人をピークに人口は減り続け、82年5月には3万5千人に落ちつき、緊急事態も脱していた。私が初めてカオイダンに入ったのはその頃である。第3国に縁者のある人々や外国語の話せる人の多くは既にフランス、アメリカ、カナダ等の第3国へ移っていた。第3国への受け入れが決まらず、先の見通しのたないキャンプ生活を送る大人たちの間には焦りもうかがわれたが、カンボジアの人々独特の人なつこい笑みを誰もがもちあわせていた。そして子どもはといえば、ほとんどの子が毛先を金髪に脱色したような髪をしていた。当初からUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の食糧配給が続けられており、当時も充分ではないにしても食糧は供給されていたが、母親の妊娠中や乳幼児期の栄養が足りなかったための後遺症である。84年になるとそのような子どもたちをほとんど見かけなくなっていた。栄養状態は安定しているのである。落ちついているように見えるキャンプ生活であるが、ここで生まれた子どもたちは周囲約4.5kmの収容所内の生活しか知らず5歳になり、大人たちはキャンプが閉鎖されるという噂の中で、第3国へ受け入れられる日がくるのを待つという、心理的に追いつめられやすい状況にあった。私たちボランティアは夕方5時以降はキャンプ内に留まることが禁じられているためカオイダンの昼の顔しか知らないが、カン



◇「希望の家」の庭で

ボジアの人々から夜中の強盗、暴力事件の話を書くのである。82年末、サケオキャンプが閉鎖されカオイダンに統合される前後から強盗事件は起こり始めていたが、昨年来エスカレートし、タイ軍兵士が強盗団に射たれたり、強盗が人々の家をしらみつぶしに捜し、盗るものがないのでほんの10パーツ(100円)でも持って行くという状況で、自分たちの地区がいつ狙われるかわからず夜も眠れないというのである。

82,3年の頃「希望の家」に通ってきていた子どもたちや、クメール人スタッフの多くは第3国に行き、1年3ヵ月後再び渡タイした時には、初めて会う子どもやスタッフがほとんどであった。新しく「希望の家」で働き始めた人のうち、保育者や織物教室責任者など多くは79年末からキャンプにいる人々であり、やっと職に就く番がきた人々である。先行きが不安定で治安の劣悪な状況の中にあっても生きる姿勢の積極性、子どもに対する謙虚さを失わない人々に、日本から出かけて行った私たちは教えられることが多い。明日、なにが起きるかわからないという国境地域やカオイダンキャンプで何年も暮らす人々。過去形でなく、私たちが生きている現代という時代がどのような時代で、なにが起きているのかを知るのは容易なことではないが、戦間が繰り返され、その直接の被害者が難民となり家族も分散したまま世界中で各々生活しているという事実。そしてその中の約4千人が日本で生活しているということをしっかり見すえ、生活の中で少しずつでも考え続けていきたい。

82年5月-83年4月 現地ボランティアとして渡タイ
84年7月-8月 再度渡タイ



◇キャンプでの生活—ブラックマーケット

写真 野中章弘

(成沢貴子)

日本に定住したカンボジア難民

—シアシーさん一家を訪ねて—

(横井和子)

大多数の人が一步国外へ出る時、誰もが持参するものはパスポートである。これさえあれば一部の国、地域を除いてどこにでも行くことができ、保護を受けられる。では難民はどうなのか。カオイダン・キャンプでは、そこに収容されている難民であることを証明するカードを常時身につけている。そのカードがないことがわかればタイ軍によってカンボジア領内へ返されてしまうし、食糧配給などはもちろん受けられない。そのカードを持っているからといって誰でも第三国へ行けるわけではない。

運良く日本へやって来たカンボジア人、シアシーさん一家を横浜瀬谷のアパートを訪ねた。部屋には石膏で型取ったレリーフのアンコール・ワットやポパティビーの踊る姿（世界的舞踊家でシアヌークの妹。フランスに亡命中）が飾られている。

34歳のシアシーさんは24歳の奥さんテリーさんと一人娘で1歳2ヶ月になるポバラちゃんの3人家族だが、向いのアパートにテリーさんのお母さんと妹さんも住んでいる。

シアシーさんはカオイダン・キャンプでCYRのスタッフとして働き、テリーさんも保育園の先生として働いていた。二人はバナニコムにある第三国定住のための一時滞在収容所で結婚し、日本で子供が生まれた。テリーさんはバナニコムで英語を勉強しており、お姉さんの住むアメリカ合衆国へ行きたかったそうだ。シアシーさんはバナニコムの日本語学校で10ヵ月間日本語を勉強した。



なぜ日本に定住を希望したのだろうか。

話はポルポト政権の前にまで逆のぼる。大学を出て英語のできるシアシーさんはブノンペン（カンボジアの首都）の船会社で三等事務官としてテレックス等を使って仕事をしていた。そこに日本人のキャプテンがいて「日本に来て船の操縦士の資格を取って働かないか。」と誘われていたという。ポルポトが政権を握った時、航海中だった仲間達はタイ、マレーシア、ベトナムへと散り散りになってしまった。ヘン・サムリン政権になってからは、ラジオで音楽も聴けるようになったが、ベトナムとソ連のものが中心でそれも内容は戦争を扱った歌が多く、カンボジアの伝統的な男女のかけ合いの美しい歌はめったに聴けなくなった。80年から始まったユニセフの救援活動にスタッフとして雇われたこともあったが、82年にカオイダン・キャンプへ来た後もあの日本人キャプテンの言葉を忘れなかった。外国船の往来がにぎやかな横浜港でシアシーさんの希望は叶えられたのだろうか。否。「たくさんの外人が働いています。でも私は「難民」だから働けない。」パスポートがないが故にこの排他的な言葉「外人」としてすらも認められない。

テリーさんは、ポルポトが政権を握った時中学3年生で、以来教育を受けるチャンスを失ってしまった。本来、受けられるべき教育が受けられないというのは残念なことである。ましてそれが自分で学びたいと判断のできる年に至らない小さな子どもたちにとっては。ポバラちゃんはもう少し大きくなったら日本の保育園に通うことになるだろう。二ヶ国語を話す帰国子女（中には三ヶ国語以上の人もいる。）はよく羨ましがられるがポバラちゃんが羨ましがられるかどうかは疑問だ。

ポバラちゃんの年令をたずねたらシアシーさんはさりりと日本語で答えてくれた。よくたずねられるからだろう。テリーさんのお母さんは、カンボジアに残してきた2人の娘のことを心配して「さみしい」を連発しながらもポバラちゃんの手をとり踊りを教える。多くの不安をかかえるシアシーさん一家にとってポバラちゃんは希望の光となっているようだ。

難民問題を考えるうえで、政治的的背影がどうなっているのか知らなければならぬと思う。そしてキャンプを出て第三国へ定住したからといって問題が解決したわけではない人たち—もしかしたら明日隣りへ引越してくるかもしれない—のことも忘れてはならないと思う。

催しもの

84年

10月14日

第5回「160人の母のコンサート」5つのコーラスグループのお母さんたちが若い難民のためにと、5年間チャリティコンサートを開き、今回が最終回。「希望の家」の様子をいざりが伝える。(北九州市小倉)

160人の母のコンサート実行委員会主催。

15-27日

パネル展示。第一勧銀広尾支店にて。(東京・広尾)



26-28日

パネルと現地製品の展示。キリスト教保育専門学院・学院祭にて。卒業生の会員や現地ボランティアOGが協力。(大阪・山崎)

28日

第10回若い難民のためのバザー。当日のボランティアは90名以上。



そろいの手染めエプロンで協力。若い難民を考える会主催。(東京・広尾)

28日

バザー参加・スライド上映会
第2回難民のための三鷹ガレージセール実行委員会主催。
(東京・三鷹)

11月3日

バザー参加。うめだ子供の家主催。(東京・梅島)

17日

バザー参加。京都ソントクラブ主催。(京都)



◇カオイダン・キャンプの写真の前で、キャンプ内で織られた綿地を展示即売する。

25-29日

CYR製品の展示即売。社会福祉機器展難民コーナーにて。全国社会福祉協議会主催。(東京・浜松町)

30日

第1回ボランティア交流会。新旧のボランティアが集まり、CYR活動の今後を語り合う。(事務所)



12月2日

現地ボランティア豊島庸子帰国報告会。(大阪)

15日

第2回ボランティア交流会。(事務所)

26日

第3回ボランティア交流会・いざり代表をかこんで。
(事務所)

85年

1月26日

第4回ボランティア交流会。85年第1回の月例会とし

1985.4.15

てはじめての集まり。前日の新聞都内版に取り上げられ、
会員以外の方も多く参加。

2月2日

第5回交流会—現地ボランティア関口晴美帰国報告。
(事務所)

23日

第6回交流会—インドシナの歴史とカンボジア社会に
ついて学ぶ。(事務所)

3月9日

第7回交流会—現地ボランティア三浦則子帰国報告。
(事務所)



CYRメモ

84年

- 8・4 三浦則子渡タイ(41人目のボランティア)。
- 8 関口晴美一時帰国。
- 22 第16回理事会。(事務所)
- 23 関口晴美渡タイ。小倉雪枝2度目の渡タイ。
- 24 河村好美2度目の渡タイ。
- 25 いいぎりゆき代表渡タイ。
- 27 山崎尚枝渡タイ。
石神澄子氏(日本ユネスコ協会連盟)カオイダン
保育センター「希望の家」来訪。
- 28 広戸直江理事タイ現地活動視察。
- 9・5 高橋周平, 松本行晴, 三好武文氏他, 政府定住調
査団7名, 保育センター訪問。
- 13 豊島庸子, 一年間の現地活動を終え帰国。
- 10・2 「国境なき学校」(ESF:フランスの団体)のバン
ピナイ・キャンプスタッフ2名がカオイダン保育セ
ンターを見学。
- 12 W・H・ウェリング氏(バーナードファンリア財団:
オランダ)CYRプロジェクト視察。
- 18 外務省国連局遠藤審議官, 保育センター来訪。
- 21 第17回理事会。(事務所)
- 11・1 いいぎり渡タイ。
- 5 日本ユネスコ連盟スタディツアー参加者14名にCYR
活動を説明。(ユネスコ・バンコク)
- 11・7 加藤巴江氏他3名(国際婦人教育振興会)保育セ
ンター訪問。

10 スパンナタット氏(スリナカリンウィロット大
学タイ)他3名, 保育センター見学。

12・23 第18回理事会。(事務所)

85年

- 2・1 関口晴美一時帰国。2・17渡タイ。
- 10 第19回理事会。(事務所)
- 3・3 三浦則子一時帰国。3・24渡タイ。
- 4 いいぎり渡タイ。
- 7 「希望の家」取材。TBSラジオ。
- 10 A・Mムボウ ユネスコ事務局長, 保育センター視察。
- 26 森山真弓外務政務次官, 保育センター視察。

事務局から

- 59年5月以来, その任にあった広戸直江, 山極小枝子
両事務局担当理事は, 10月21日より, 見坊和雄理事に
交代しました。(59年10月21日, 理事会にて承認)
- 60年1月から3月にかけて合計4回, 読売, 朝日新聞
紙上にCYRの紹介の記事が掲載され, 電話や手紙によ
る問い合わせが60件あまり寄せられました。
- 話題のアメリカ映画(キングフィールド)でボルボト兵
が使うチェックのクローマーはカオイダン CYR で働
く人々が織りました。
- 事務所の電話がキャッチホンになりました。事務所が
通話中に電話をおかけの方には呼び出し音が聞こえま
す。応答がすぐなくても切らずに少しお待ちください。